

説教 「身勝手な少年は父の家に行った」

聖書 レビ記 19：17～18／ルカによる福音書 2：41～52

「両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った(ルカ 2:41～42)」。この年、男児の親離れを示すような出来事があった。

旅路でも滞在中でも、子供は親類や仲間のどこかで遊んでいるのが常で、視界になくとも気にしなかった(2:44)。ところが帰路、両親は一日分を来た所で(2:44)はたと息子イエスがいないことに気づく。

両親は真っ青になり「捜しながらエルサレムに引き返した(2:45)」。街道を帰郷する集団に肩ぶつけ、「こんな子見かけませんでしたか」と尋ねながら都へ急いだ。こうしたことは案外多いのではないか。ヨセフとマリアはうっかり父さん母さんではないし、イエス少年が特殊なのでもない。

十二歳とはどんな年齢なのか。ユダヤの男児は12歳から青年期とされ、13歳からは成人の宗教義務を負うという。親は狼狽しても、倅は迷子になってメソメソする齡でもないだろう。

ちなみに私が12歳の頃には、家族とは別行動しなかった。ただ親の困惑(2:48)を無視するイエスは(2:49)、かなりの身勝手な少年だ。

エルサレムに戻っても、イエスはなかなか見つからない。純朴な両親は、まさか倅が学者たちの座にいるとは思わなかった(2:46)。

新共同訳の描写では、神童イエスを囲んで学者たちが教えられている感じだが、これはいささか違うと思う。私なりに訳すと「教師たち(聖書の)に混じって語り合っていた(2:46)」。

同じような衣の教師が車座になって論争している傍らを、父母は幾度も行き来したが見落としていた。ようやくイエスを見つけた母マリアの半泣きの怒りは、当然のことだろう(2:48)。

半泣きの母に対してイエスは答える。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか(2:49)」。おいおい、君は神の子だとしてもだ、その言い草はないだろうよ。

イエス少年が述べる「父の家」の意味は、両親にはさっぱり分からない(2:50)。父の家で、教師たちと当たり前のように語り合う少年を、私たちはどう見るか。

この車座は教会の隠喩ではないのか。地縁や血縁、仕事仲間でもない、神の言葉を共にする集団。エルサレムから帰る「世の流れ」とは逆方向で(2:45)、既存の価値や共同体とは違う新たな神の群。

この群の中での、キリストの「居方」に注目したい。車座になった私の隣で、あなたの隣で、自然に「話を聞いたり質問したりしておられる(2:46)」ではないか。

後にイエスはこう言う。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである(マタイ 18:20)」。

キリストの名によって集められる隣人は重要だ。ウマが合うとか、話が合うとか、地縁血縁同窓会とかの、世の仲間ではない。

「自分を愛するように隣人を愛しなさい(レビ 19:18)」という戒めについて、「そんなこと無理」と言うだろうか。そりゃ、あなたの努力では無理だ。だが「わたしは主である(19:18)」という言葉を見落とさないでほしい。隣人の間にキリストが「居る」ゆえに、私たちは愛しうる。

キリストの「居方」は自然でさりげない。礼拝で、日々の祈禱で、折々の労働で、私たちは当たり前前にキリストと出会っている。ゆえに「自分のように愛する隣人」に出会う。そこが「父の家(ルカ 2:49)」。



《おまけのひとこと》

愛し 憎み 感謝し 嫉妬し 自分をほどよく位置づける そんな自らの足場にうんざりしていた
キリストは私を位置づけず 裁かず 世辞はなく 静かに微笑んでいる そうか これなのだな